

〈コケット〉の系譜

— Eliza Wharton から Lily Bart へ —

別 府 恵 子

I はじめに——言語と女

すべての物体、物象は名を与えられることにより生を受け、存在する。と同時にその呼称（言葉）によって規定される。橙色の楕円形をした柔らかく、良い香りのする物体を手にして私たちは、それを〈オレンジ〉と認識するが、別の名称を使用しても、その物自体は変化しない。ただ、便宜上私たちは、その果実を〈オレンジ〉とすること何の疑問もはさまないし、また、その物体固有の色から〈オレンジ色〉なる語が創られる。

このように、私たちは周りの事物、物象を認識するのに言語を媒体とするが、この言語の存在は、概念と物象のはざまにあって想像を絶する機能を果たするのである。言語と社会・人間の間には密接かつ重層的關係が成立する。言葉は、生活環境を刺激し、変化させる。また、言葉がひとり歩きをする場合もある。言葉の無化という現象も起こる。

『創世記』には天地創造の物語と前後して、人類の起源が記されている。すなわち神は土くれから人間（'adham）を創造され、人間に万物の命名を命じられたのである。'adham という古代ヘブライ語は、元来総称的に人類（human-kind）を意味した。'adham が Adam = 男とされたのは、英語訳における片手落であってこの片手落ちが深刻な過ちへと発展したのである。すなわち、男だけに命名という重大な権利が与えられたことになる。『女性解放の理念を求めて—父なる神を超えて—』（1973）の著者、メアリー・ダリー（Mary Daly）は、

「人間として存在することは自己、世界、神を命名すること」¹⁾だと主張する。とすれば、人類の歴史の初めより、女にはこの人間としての「奪うことの出来ない権利」が授与されていなかったことになる。そこに家父長制社会の元凶をみるのは、この急進的神学者ひとりでない。『言葉と女性—新しい時代の新しい言語—』(1976)の著者たち—ケイシー・ミラー (Casey Miller) とケイト・スウィフト (Kate Swift)—もダリーの弁を受け、言語が男固有のものであったこと、男性優位社会温存のため、言語 (=男) が女を規定し、社会のなかにどう組み入れているか、性差別、性的偏見の助長に如何に言語が荷担してきたか、広範囲にわたる例証を用いて論証している。²⁾

言語生活習慣が、女の在り方や生き方を如何に残酷に規制してきたかは前述の著者たちが明らかにするところだが、一方文学作品においても、言葉が女を規定し類型化するのに荷担してきたことは周知の通りである。そこで、本稿では、Hannah Foster の *The Coquette* (1797) のヒロイン、エライザ・ウォートン (Eliza Wharton) から、19世紀アメリカ小説のヒロインを経て、Edith Wharton の描く〈コケット〉、*The House of Mirth* (1905) のリリー・バート (Lily Bart) への系譜を考察し、〈コケット〉なる言葉が、全人格的存在である筈の一人の女を類型化、抹殺する過程、すなわち言語による暴力 (=rape) の構造を明らかにしたい。

II Eliza Wharton は〈ザ・コケット〉か？

OEDによると、〈coquette〉という語の原義はフランス語の〈coq〉=雄鶏に由来し、〈to coqueter〉という動詞形から、英語に借入され、雄鶏が雌鶏の前でその冠毛を誇示する仕様を意味する語であった。フランス語では、〈coquet〉と綴られ、男女共通に使用されていたのが、18世紀 (特に1720年以降) 女性形

1) Mary Daly, *Beyond God the Father: Toward a Philosophy of Women's Liberation*, Boston: Beacon Press, 1973, p. 8, 37.

2) 寿岳章子氏もまた、『日本語と女』(岩波新書, 1979)のなかで、日本の女のさまざまの問題と言葉のかかわりを爽やかな筆致で論じている。

の〈coquette〉が多用され、1740年以降はこの女性形が常用され、男性形の〈coquet〉は廃止、現在では男性形は使用されていない。今日では、〈coquette〉なる語は、(女が男に対して)媚を見せる、あだっばい女、浮気女、などを意味し、原義であった「女にじゃらつく男」を指示することはない。男性形の〈coquet〉が廃止された後も、「浮気女」、「移り気の女」というように、不道德な女、節操のない女という否定的意味で女性にのみ使用されてきた事実は、如何に言語が女性蔑視に寄与しているかの一例であろう。前出のケイト・スウィフトらも、男を軽蔑する語は女のそれと比較して、非常に少ないと述べる。動物の雄を示す〈bull〉、〈buck〉などは、性的能力、力を意味するのに対し、雌を表す、〈cow〉、〈vixen〉、〈bitch〉など、受動性、気まぐれ、性的ふしだら、を意味することが多い³⁾。このような事例は、前述の、最初男女両性共通に使用されていた〈coquet〉が、女性形のみ限定されてきたという事実同様、言語習慣における女に対する暴力の一面を表すもので、言葉が、「この上なく残酷な道具」⁴⁾になりうる一例である。

18世紀に、〈coquette〉なる女性形が多用されるようになったことと、1797年に、Foster が、Elizabeth Whitman という実在の女性の話—*The History of Eliza Wharton*—に、*The Coquette* という題をつけたことは、この語をめぐる語源学上、さらに歴史の変容と無関係でないと思われる。*The* という定冠詞が冠されていることから、作者が、18世紀における〈coquette〉の言説と形象が何であるか究明しようとしたと推量しても差しつかえあるまい。

最近では、女性文学の掘り起こしが盛んになり、*The Coquette* の新しい復刻版も出版されたが、⁵⁾ まだ Foster の作品に不案内な読者のためにそのあらすじを紹介して、論を進めたい。

3) Casey Miller and Kate Swift, *Words and Women: New Language in New Times*. New York: Doubleday, 1976, p. 103.

4) 『日本語と女』 p. 2.

5) Introduced by Cathy N. Davidson, Oxford University Press, 1986.

〈コケットの系譜〉

親の決めた婚約者ヘイリー牧師の死後、知人宅で「喪に服して」いるエライザの前にボイヤー牧師と、放蕩者として悪名高い伊達男 (= coquet) サンフォード大佐の二人の求愛者が現れる。美しく才気溢れるエライザに惹かれながらも、サンフォード大佐と親密なエライザをみて、彼女の真実を疑うボイヤー牧師は、聖職者としての真理追求と、愛の充足の間を彷徨し、結局友人セルビーの妹と婚約する。サンフォード大佐もエライザの魅力に惚れ込んでいながら、財産目当てに金持ちの娘と結婚する。しかし、エライザを忘れることが出来ず、奸計をもって彼女を誘惑することに成功するが、それが醜聞になり、エライザは母の家を出て、ひとり出産の苦痛に耐え、淋しい旅の宿で死亡する。エライザの悲惨な最期を聞き、サンフォード大佐は改悛し、二度と自分のように、純真な女性を破滅に追いやってはならないと友人に書き送るのである。

The Coquette: or The History of Eliza Wharton は、当時流行していた Richardson の *Pamela* (1740) に代表される「感傷小説」の例にもれず、書簡体で書かれ、全体で74の書簡から構成されている。さらに、それらは三対の往復書簡つまり三人の重要人物とその友人(コンフィダント)—エライザとルーシー・フリーマン (=サムナー夫人)、ボイヤー牧師とセルビー、サンフォード大佐とデイトン—からなり、それぞれエライザに関する印象が綴られ、エライザ像—〈ザ・コケット〉—が浮き彫りにされる。すでにふれたように、題名の定冠詞は作者が、18世紀に多用された〈coquette〉という言葉の形象化をエライザ像に試みたと推察できよう。そこで、作品中、〈coquette〉、形容詞形の〈coquettish〉、そして名詞形の〈coquetry〉がどのように使用されているか見てみよう。用例は意外に少ないのである。

まず、エライザが友人のルーシーに〈coquettish〉と非難されて、次のように反論するところがある。

I believe I shall never again resume those airs, which you term *coquettish*, but which I think deserve a softer appellation; as they proceed from an in-

《コケットの系譜》

nocent heart and are the effusions of a youthful, and cheerful mind.⁶⁾

「ご忠告通り、貴女にコケティッシュといわれるような振る舞いは今後絶対にはすまい。でも、それは無邪気な心、陽気さや若さからくるもので、別のいい方は出来ないものかしら。」

つまり、彼女は若くて、陽気な性格の持ち主で、羽のある小鳥や蝶が飛ぶように気分が弾んでいる (= volatile) だけのこと、それを (coquettish) = 軽率、不しだと断定するのは、不当なこと (the absurdity of a custom) だということのである。

当時、若い女性特に良家の子女 (= ladies) に期待されたことは、親の決めた相手との結婚という社会規範に則った家庭における妻、そして母という神聖な義務の遂行であった。したがって、エライザもヘイリー氏とは、性格や人生観も異なり、お互い相入れない相手と承知の上で、両親の望みにかなうよう彼女自身の気持ちを犠牲にしようとしたのである。

Both nature and *education* had instilled into my mind an implicit obedience to the will and desires of my parents. To them, of course, I sacrificed my fancy in this affair, ... (6 イタリック筆者)

ところが、ヘイリー氏の死によって、そうした ^{しがらみ} 柵 から解放されたのであるから、エライザがその自由を満喫したいというのは自然の理である。因習にとられずに、若さと無垢が保証してくれる人生の楽しみを享受しようということである。

Let me have opportunity, unbiased by opinion, to gratify my natural disposition in a participation of those pleasures which youth and innocence afford. (18)

もちろん、誰もその自由と権利を彼女から奪うことはできない筈である。しか

6) Hannah Foster, *The Coquette*, 1979; rept. New York: Columbia University Press, 1939, p. 9. 以下同書からの引用は本文中カッコ内に頁数で示す。原文の綴りは現代綴りにかえてある。訳は筆者。

《コケットの系譜》

し、この極めて自然な欲求をエライザが女であるということで社会は認めない。なぜなら、エライザのように自分の気持 (= inclination) に誠実に従うことは、社会規範からの逸脱であり、異端者として、社会的制裁を甘受しなければならない。そこで、問題の〈coquetry〉が使用される。つまり、エライザに〈coquette〉 (= 浮気女) という烙印が押され、彼女の才能、数々の美点が抹消されてしまう。すなわち、エライザの人格は無視される。18世紀に、男性形の〈coquet〉に代わって女性形の〈coquette〉が一般化したことはすでに述べたが、同じ18世紀には、Alexander Pope の “Most women have no character at all” など、女性蔑視の風潮が流布していたのは興味深い。

ボイヤー牧師の友人セルビーは、Pope の警句 “Every woman is, at heart, a rake” を引用して、エライザの快活さを移り気と批判する。ボイヤー氏もまた、サンフォード大佐と無邪気に戯れるエライザを目の前に、彼女生来の屈託なさ、生の喜びを享受する性向を、「派手好き、言動に軽率、快楽を追求する」 (= the follies of coquetry) と糾弾する。

What pity it is, that so fair a form, so accomplished a mind, should be tarnished, in *the smallest degree*, by the follies of *coquetry* !

(107 イタリアック筆者)

さらに、ボイヤー牧師はエライザとの結婚を断念したことをセルビーに告白するが、そのなかでふたたび〈coquette〉を使用している。「私の誘惑者と訣別する日がきた。理性がいま一度勝利した日。浮気女の奸計に打ち勝った記念すべき日、彼女の巧妙な手練手管にかからなかったことを祝ってくれ」と友人に書き送る。

… the day which divides me from my charmer ; … ; the day on which my reason assumes its empire, and triumphs over the arts of a *finished coquette* ! Congratulate me, my friend, that I have thus overcome my feelings, and repelled the infatuating wiles of a deceitful girl.

(111-112 イタリアック筆者)

ボイヤー氏が、エライザの第一印象を同じ友人に「真理と美德と優雅さが美しい女性には相応しいが、私はまさにそうした理想の女性に出会った」(13-14)と打ち明けていることを考えると、ボイヤー氏の心変わりこそ、“volatile”=軽率というべきであろう。この個性豊かな一人の人間を破滅させた、ボイヤー氏のエライザ誹謗の弁や彼女にあてた絶縁状(第40及び47の書簡)は、彼の分別くささ、偏狭なピューリタニズムを露呈するものだが、同時に自尊心を傷つけられた男のエゴイズムをもあらわしている。当時の社会は、そうした男のエゴイズムを容認する一方、女が自由に振る舞い、人生を享受するのを抑制したのである。それは、Robert Browning の“My Last Duchess”の独白の語り手、フェラーラ公の残酷無比な専制君主振り、すなわち女から人間的興味、欲求一生きることを剝奪する行為とさして変わらない。大公夫人は、あまりにも無邪気に生を楽しむとしたために、大公の怒りを買って殺害されてしまうのである。

… She had/ A heart—how shall I say? —too soon made glad,/ Too easily impressed: She liked whate'er/ She looked on, and her looks went every-where.

The Coquette と題される Foster の作品で、〈coquette〉が、最後に使用されるのは、エライザの親友ルーシーがエライザに送る手紙のなかである。振り返れば、エライザを〈coquettish〉と評したのもルーシーであった。勿論、ルーシーはエライザの良き理解者で、彼女の優れた素質を充分知った上で、エライザが、あまりにも無邪気に自分をさらけ出すのを、誤解されないよう忠告するのである。エライザが、ボイヤー氏から絶縁状を受け、打ちひしがれているのを、元気づけようと、次のように書き送る。

True, you figured among the first rate *coquettes* ; while your friends, who knew your accomplishments, lamented the misapplication of them ; but now they rejoice at the returning empire of reason.

True, you have erred ; mislead by the gaiety of your disposition, and that volatility, and inconsideration, which were incident to your years ; but you

《コケットの系譜》

have seen, and nobly confessed your errors.... (158 イタリアック筆者)

Foster の創造した〈コケット〉は、自分の性格を、「移り気、快活、陽気、軽薄」と分析し、ボイヤー氏の心変わりを知った時、エライザはそれを「快楽を求める性向、虚栄心を満足させるために殿方の気を引いたのだ」と、他人の指摘を待つまでもなく、自分の非を認めている。さらに、婚約者に愛想尽かしをされて、はじめて彼の真価を再評価し、敬愛の念をこめて、もう一度自分を受け入れて欲しいと懇願する（第46の書簡）のが、この誇り高い〈coquette〉である。エライザのこうした自己認識に基づく行為が、Foster の創造した「浮気女」をステレオタイプにすることなく、生を愛した爽やかな一人の個性ある女“virtuous (= amiable) woman” (253) にしているのである。エライザが、自主性のある女であればこそ、道楽者を持して憚らなかったサンフォード大佐を後悔へと導くこともできるのである。金目当ての結婚のために、心清らかな女性 (= a virtuous woman) を犠牲にしたこと、貧困を恐れるため、純真でかつ技芸、教養にたけた女性 (= an amiable and accomplished girl [253]) との結婚を断念したこと、彼のそうした打算が自分の生涯で愛した唯一の女性を破滅させたのだと、サンフォード大佐は友人のデイトンに告白するのである。

上にみたように、*The Coquette* は高度の教養と知性、豊かな感性を持った女が、〈coquette〉として名誉を傷つけられ、破滅する過程をドラマ化したものであるが、エライザが“volatile or virtuous”という二分法を標榜するボイヤー氏により、“volatile and virtuous”と自己の価値の理解者であるサンフォード大佐の方に惹かれて、その誘惑に負けたとしても当然であろう。Foster の描く〈コケット〉は自分の人生を自ら選択する自由を享受したいと願った自立した女で、結婚を二つの個性の結合と做し、性格や人生観の落差が、結婚生活に不調和をもたらすと予想出来た女である。Foster の創造した〈コケット〉エライザ・ウォートンとは、ごく普通の女であって、殊更に〈coquette〉と呼称される必然性がない。なぜなら、前出のスウィフトたちが証言するように、〈coquette〉の同義語である〈womanizer, Don Juan, stud〉などは、女の犠牲においてある

種の讃辞として解釈され使用されるからである。⁷⁾

こうしてみると、*The Coquette* の創作意図は、その題名に反して、〈coquette〉という類型化した女を呈示するのではなく、エライザ・ウォートンという一人の個性ある女を描くことにあったといえる。⁸⁾ それはまた、人格を持った人間にある公式 (volatile = coquettish = a loose woman) を適用して断罪すること一言語が「残酷な道具」として機能する事例—を摘発することでもあったといえよう。Foster の小説の題名には 〈coquette〉 という言説と形象の落差が皮肉をこめて表示されているのである。

Ⅲ “A pretty American flirt” から Lily Bart へ

人格を持った人間を、特定の言語で規制し、その言説の枠に押し込める残忍さが、専制君主の暴力にも匹敵することは、すでに述べたが、そうした前近代的思考は、依然として文学作品にも、現在の私たちの言語生活習慣のなかにも散見される。

19世紀も後半1878年に出版された、Henry James の “Daisy Miller” においても、ポイヤー牧師の二分法—“volatile or virtuous”—が繰り返される。

James 初期の佳作短編、“Daisy Miller” はその副題に “a Study” とあるように、1881年に出版された *The Portrait of a Lady* のヒロイン Isabel Archer の肖像画のための習作、として描かれた作品で、ヨーロッパに長く在住の27才のアメリカ青年、ウィンターボーンが、天衣無縫のアメリカ娘デージー (Ann. P. Miller) の言動を判読しかねて、混迷の末、ポイヤー氏と同じ過失を犯すという筋書きである。

ある初夏の日、スイスのヴィヴェイにあるホテルの庭園で、美しいアメリカ娘に出会ったウィンターボーンは、その佳麗な出現者 (charming apparition) を、

7) *Words and Women*, p. 106.

8) Foster の *The Coquette* については、拙論を参照。『アメリカにおける女性像』弓書房、1985年、pp.36—41。

如何に分類整理しようかと苦慮する。

Miss Daisy Miller looked extremely innocent…He must on the whole take Miss Daisy Miller for a flirt—a pretty American flirt. He had never as yet had relations with representatives of that class. He had known here in Europe two or three women—persons older than Daisy Miller and provided, for respectability's sake, with husbands—who were great *coquettes*; …But this charming apparition wasn't a coquette in that sense; she was very unsophisticated; she was only a pretty American flirt. Winterbourne was almost grateful for having found *the formula* that applied to Miss Daisy Miller⁹⁾

然して、ウィンターボーンは、デイジーを「可愛らしいアメリカの浮気娘」(a pretty American flirt) と断定する。ここでもまた若い未婚の女が、目的なく男を誘うことは、coquettish, unlady-like として、世間の人々の矚撃を買ったのである。ウィンターボーンにいわせると、gentleman の尊敬に値しない女、真剣な愛情の対象にならないと判断されたのである。“She was a young lady about the shades of whose perversity a foolish puzzled gentleman need no longer trouble his head or his heart.” (86)

ここで注目に値するのは、“a flirt” が “a coquette” と区別して使用され、さらに〈coquette〉なる語に別の意味が付加されていることである。すなわち、既婚者（結婚という制度・夫という世間体に保護された女）が、他の男と婚外交渉を持つことはごく普通のことであつたらしい。そうした女たちを “great coquettes” —別格の “class”—とウィンターボーンは理解する。「あなたの振る舞いは、自暴自棄の浮気者^{フラート}のすることだ」とウィンターボーンにいわれて、デイジーは、「結構だわ。すてきな娘は誰だつて浮気者よ」と反駁する。さらに、

9) Henry James, “Daisy Miller,” *The New York Edition of Henry James*, Vol. 18, p. 17. イタリアック筆者。以下同書からの引用は文中カッコ内に頁数で示す。訳は筆者。

「夫がいて、いい年をした女性が浮気するより、若い娘が多く男性とつき合う方が、ずっと自然だと思うのだけど」—It seems to me much more proper in young unmarried women [to flirt] than in old married ones” (71) と、社会常識の矛盾、エライザのいった “The absurdity of a custom” を見事にいい当てている。

また、ウィンターボーンも社会の因習にとられることなく、天真爛漫に行動するデイジーが、ローマのアメリカ人社会から追放されるのを目の前にして、デイジーの天衣無縫さが正当に評価されないのを悲しく思うのである。

He felt sorry for her—not exactly that he believed she had completely lost her wits, but because it was painful to see so much that was pretty and undefended and natural sink so low in human estimation. (78)

しかし、そのウィンターボーン自身も、最後には、デイジーを尊敬に値しない女—(coquette)—と断定し、ボイヤー氏と同類の過ちを犯す。確かにデイジーは、エライザの末裔といえるわけだがエライザと異なって James の “a pretty American flirt” は永遠の〈アメリカのプリンセス〉¹⁰⁾に相応わしく、その評判は別として現実には、墮落しないアメリカ娘として、春の花々が咲き競うローマの墓地に埋葬される。

ジョイス・ウォレンはその著書『アメリカのナルシス』¹¹⁾のなかで、アメリカ社会において個人主義が徹底した19世紀、エマスの「自己信頼」の理念が強烈な個性 (self) を社会空間に生み出したと主張する。そして、その (self) は他者 (女) を過小評価することによって、その特異性および威力を確立したとし、19世紀アメリカ小説は、それらの強い自我を誇示するヒーローの独壇場であるという。さらに、このフェミニスト批評家は、伝統的アメリカ個人主義の絶対性、その具現者である “アメリカン・ヒーロー” のあり方に疑義を抱い

10) Judith Fryer, *The Faces of Eve: Women in the Nineteenth-Century American Novel*. New York: Oxford University Press, 1976, pp. 97–101.

11) *The American Narcissus: Individualism and Women in Nineteenth Century American Fiction*. New Jersey: Rutgers University Press, 1984.

たのが、Hawthorne と James だと指摘し彼らの女性像は偶然にも、人間としての女を描いたものであるとフェミニスト的解釈を展開させている。

ジュディス・フライヤーも指摘する¹²⁾ように、確かに、James は “Daisy Miller” において “a pretty American flirt” の自立心、自由への憧れ、その inclination に忠実に生きる勇気を詩情豊かに提唱したのである。作品の前半で、デイジーがウィンターボーンとシヨン城を訪れるのも、そこに幽閉されたという伝説の英雄—祖国の独立のために戦った Bonnivard—とデイジーを重ねることであったし、後半部で、月夜にコロシウムを訪れた時、デイジーが殉教死した古代キリスト教徒に自分を比べるのは単に偶然のことでない。なぜなら、それぞれ主義主張のために殉死するという類似—女の自由な生き方、自己主張のため、“audacious and innocent”、あるいは “volatile and virtuous” であることをデイジーは身をもって示す—が、デイジーと Bonnivard、殉死した古代キリスト教徒の間に成立するからである（たとえ、それが疑似英雄的効果のためであったとしても）。

Foster の《コケット》と比較して、デイジーには、確固たる自負、信念がある。その上デイジーは挑戦的で、エライザのように自己の“軽率さ”を素直に後悔することもない。まさに、19世紀アメリカの個人主義の申し子、“self-reliant” girl といえよう。《coquette》という記号の形象化が、時代を経て、デイジー・ミラーという生命力溢れる“自然の児、(= a child of nature)”, “a pretty American flirt” に変容したのである。もちろん、デイジーは“ローマ熱”にかかって死亡するのであるが、皮肉にもデイジーの死後、ウィンターボーンは、ジュネーブに戻り、相変わらず “a very clever foreign lady” (94)—すでに無化した《a great coquette》の虜でしかないのであるから、デイジーの自己弁明は十二分になされたとしてよい。

前世紀末1890年代には、第一次の女権拡張運動の影響もあって、種々の意識改革が起こった。『アメリカの1890年代』の著者、ラーザー・ジフも1890年代は、

12) Fryer, pp. 97—101.

文学において女性の問題に初めて焦点の当てられた年代だと指摘している¹³⁾。文学にみられる〈coquette〉たちも、エライザやデイジーのような憂き目をみることはなくなり、その言語自体も無化したとみてよい。それに代わって「新しい女」—自分の力で自足して生きるヒロイン—キャリー・ミーバー (Theodore Dreiser, *Sister Carrie*, 1900) やアンデイン・スプラグ (Edith Wharton, *The Custom of the Country*, 1913) など—の誕生をみることができるがここでは最後の〈coquette〉ともいえる Wharton の *The House of Mirth* (1905) のリリー・バート (Lily Bart) を取りあげて、〈coquette〉の系譜、その呼称をめぐる考察を閉じようと思う。

Wharton はその作品のなかで、社会や家庭における妻の役割—自己実現を断念し、夫の期待に従うこと、夫の人生に自己を順応させること—、結婚制度というものを皮肉な視点から描くが、*The House of Mirth* においても、女であるがために、一人の人間の生き方が規制され、抑制されることの問題を摘発している。

リリー・バートは、活達で頭の良い、鋭い感受性と魅力をもった美しい29才の女性。その名が示すように、リリーは気位が高く、百合の花の強烈な色香を思わせる個性の強い女である。父親はリリーが19才の時に破産し、死亡。母親も続いて死亡。後见人である叔母から小遣をもらって生活しているが、美しいものぜい折な品物に憧れるリリーは、社交界の金持ちの女性のコンパニオン・秘書としてお手当をもらい、分不相応な虚飾の生活を送っている。その生活を維持するために、愛のない結婚をしようと策略を企てるが、生来の衝動的な性格のため、ニューヨーク社交界のタブーを破って最後の結婚相手を逃がしてしまう。また彼女が秘かに好意を抱く男性ローレンス・セルデンのために、リリーの計画は予期せぬ方向に進行していく。虚飾の世界 (*The House of Mirth*) に生きながら、それだけでは満足出来ず、精神の向上 (“a kind of republic of the

13) Larzer Ziff, *The American 1890's*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1966, pp. 276—280.

spirit”¹⁴⁾を希求するリリーだが、彼女の“volatile”ともいえる無分別な行動のために、閉鎖的な社交界の梯子を一段ずつ落ちて行き、最後には行き場を失って、彼女が忌み嫌った場末の下宿屋^{アパート}の部屋で睡眠薬自殺を計る悲劇のヒロインが Wharton の創造した〈coquette〉である。

最初、Wharton は、*The House of Mirth* に *A Moment's Ornament* という題名を考えていた。それが『伝道の手帳』からの引用に変更されたのは、「一時の装飾」あるいは「社交界の花」としてのリリー・バート＝coquette から、作品の主題が、リリーの優れた特性を抹殺し、破壊する社会—五番街の黄金時代、金権貴族社会全盛の頃のニューヨーク—「歓楽の家」に移ったことを示唆するが、小説の興味の中心は依然として、リリーの悲劇的な生き方にある。それに Wharton の創作意図が、ニューヨークの金権貴族社会の内幕暴露にあったのなら、*A Moment's Ornament* より、*The House of Mirth* の方がより含蓄のある題名といえよう。すばらしい個性の女性を破滅に追いやった社会の冷酷さ、空虚さを、如実に示す題名であるし、Foster のエライザや James のデージーを断罪した“The absurdity of a custom”を露呈する題名でもあるからである。

Sorrow is better than laughter; for by the sadness of the countenance the heart is made better. The heart of the wise is in the house of mourning; but the heart of fools is in the house of mirth. (*Ecclesiastes* 7:3-4)

「^{かなしみ}悲哀は^{わらい}喜樂にまさる。その顔にうれいを帯びるなれば、心も善に向えばなり、かしこき者の心は哀傷の家であり、おろかなる者の心は^{たのしみ}喜樂の家であり。」リリーは「^{たのしみ}喜樂の家」を追われるわけだが、その代償としてそこの一員であった時には理解出来なかった世の中の悲哀、人間の憂いを認識することが出来るという、逆説的にリリーが精神的成長を遂げたことを作者は強調する。死の直前に、ネエティという女にリリーが示す関心と共感、以前彼女がネエティに施した“charity”(＝金)でなく、リリーの真実の“charity”(＝愛)を表している。

14) Edith Wharton, *The House of Mirth*, Penguin, p. 70. 以下、同書からの引用は本文中カッコ内に頁数で示す。訳は筆者。

それは “If it was possible for a Coquette to love” といいた偏見を是正するリリーの行為であって、虚飾に身をやつし、ぜい扱を好んだ (coquette) リリーの人間的成長に、Wharton のヒロインに寄せる興味の中心があることを立証してくれる。The House of Mirth におけるリリーの人間的成熟は、これまで考察してきた (coquette) たち—エライザやデージーには配慮されていなかった要素である。

リリーを、Foster の創造した (coquette) の末裔としたのは、エライザに共通の素質—知性と教養、美貌、社交術にたけていること、派手好き、虚栄心を満足させるために男の気を惹くこと—を所有しているからであった。さらに、リリーは自由の享受を重視し、結婚という社会規範に制約されることを好まない。セルデンの言うように—“Isn't marriage your vocation?” (11)—彼女の欲望を満足させるためには、結婚が最善、唯一の方策と承知しながら、リリーは、自分の人生、自由を犠牲にすることに恐怖を覚えるのである。したがって、結婚出来そうな相手が現れると、無意識的に無分別な言動に走り、再三その機会を逃してしまうのである。つまり、「細心の努力でもって身を粉にして働き計画的に準備を進め、いざ収穫、刈り入れという時になって、寝過ごしてしまうか、遊びに行ってしまうのをふいにしてしまう」リリーの気まぐれ (= volatility) をフィッシャー夫人は鋭く見抜いている。

That's Lily all over, you know; she works like a slave preparing the ground and sowing her seed; but the day she ought to be reaping the harvest she oversleeps herself or goes off on a picnic. (191)

当時、女にとって、職業と同義語であった結婚 (Isn't marriage your vocation?) を拒否することは、家長制度、家庭第一主義への挑戦であり、社会的秩序を乱す行為として、罰をうけるのが¹⁵⁾ (coquette) たちの宿命だったといえる。リリーもその例外ではない。

15) Elizabeth Ammons, *Edith Wharton's Argument with America*. Athens: University of Georgia Press, 1980, p. 38.

ここで、リリーが秘かに好意を寄せるセルデンについて一言ふれると、この優雅な独身の弁護士も、美貌で自己主張のはっきりしたリリーに興味を持ち、一度は自分をアンドロメダの鎖を解き、救出するペルセウス（162）にたとえて、リリーを愛し救おうと決意しますが、深夜、ガス・トレナーの家から出てくるリリーを目撃して、彼女の潔白の確認もせず、不しだらな女（= coquette）として、リリーを見棄ててしまうのである。セルデンをボイヤー牧師やウィンターボーンと同列に置くことは、いささか無謀かもしれないが、セルデンのとった無責任な態度は、本質的に彼らの残酷な行為と大差ない。というのは、リリーは二度セルデンのアパートを訪れるが、二度ともセルデンの書斎の書棚に置かれた La Bruyère の初判本に言及がされているからである。最初はリリーが、書棚に La Bruyère を戻す場面（13）で、次はリリーが別れを告げにセルデンを訪れた時、セルデン自身が La Bruyère を手にしていたとリリーが回想する描写（308）がある。偶然にしては、上手く出来すぎていないだろうか。La Bruyère といえば、*Caractères*（1688-94）の“Des Femmes”のなかで、女を痛烈な諷刺の対象にしている。また Woolf が『私だけの部屋』で、Pope と並用し女性蔑視の例として La Bruyère を引用しているのである。

“*Les femmes sont extrêmes : elles sont meilleures ou pires que les hommes.*”¹⁶⁾これは、まさにボイヤー氏の二分法—“volatile or virtuous”—に他かならないのではないだろうか。Wharton の *The House of Mirth* には、〈coquette〉なる語は殊更使用されていないが、以上みたように、リリーもエライザやデイジーと同様、生きる自由を希求し、「自我」を主張し、自分自身の人生を創造しようとするが、女であるがために、社会からの規制、抑圧を甘受することになる。唯、Wharton のリリーの場合には、〈coquette〉という言葉の暴力というより、リリー自身の内面の強さが、社会との葛藤を生み、結局、金権貴族社会の暴力に押しつぶされたとするのが妥当であろう。

16) La Bruyère, “*Des Femmes*,” *Les Caractères*, Paris : Garnier, 1962, pp. 112-136, また Virginia Woolf, *A Room of One's Own*. New York : Harcourt, 1929, pp. 29-30 参照。

IV おわりに——ふたたび言語と女

本稿は、言語生活習慣が、如何に女を規定し、男より不利な立場に押しこめてきたかを明らかにするため〈coquette〉という呼称をめぐって、Foster のエライザ・ウォートン、James のデイジー、Wharton のリリーと、〈coquette〉の形象がどう変容してきたかを概観したわけであるが、リリー・バートをもって、所謂〈coquette〉なるものも消滅するのではないだろうか。つまり、「自己主張する女」、「volatile」なヒロインは、19世紀末から20世紀初の「新しい女」、1920年代の“flapper”として受け継がれ、現代文化のなかでは、エライザも、デイジーも、そしてリリーも、「解放された自遊人」、「いい女」、「結婚しない女」と種々にその言説が交替し、エライザに押された「烙印」は消失したと考えてよいのであろうか。否、そうした別のラベルがまた女たちを拘束し、真の人間性・個性を歪曲しているのでなかろうか。

フェミニズム運動が隆盛を極めた頃に、未婚か既婚かで女を識別していた Miss と Mrs という敬称に代わって、男の Mr の対義語として Ms なる敬称が造語された。当時、違和感を持った Ms なる語も、現在では、私たちの意識の深層に定着しつつある。最近では“inclusive language”（＝包括言語）といって、両性を包含した言語、“man and woman”の代りに、“humankind”あるいは“humanity”を優先する風潮であるという。しかし、*An Intelligent Woman's Guide to Dirty Words* (1973), *Volume One of the Feminist English Dictionary* の編纂者の一人 Ruth Todasco が「いまになって、はじめて英語（＝言語）が私を何と称し、意味づけてきたか、分かりかけてきた¹⁷⁾」と証言しているように、ケイト・スウィフトらのいう「新しい時代の新しい言語」への道はまだ遠い。例えば、“Ladies and Gentlemen”という常套句、西洋文化のなかで、女性優先の美德を表す騎士道精神の名残りとして理解していたのだが、OEDによると、“lady”の対義語は“lord”であって、“gentleman”は“lord”より低い身分の男性

17) *Words and Women*, p. 103.

に使用される言葉である。したがって、身分の上下からいって ladies が先行するのが当然であって、逆に “lord” と並列されるべき “lady” が格下げされたことになる。ここに、“lady” という語の墮落が始まり、本来の意味がうすれ、現在は無化してしまったのである。さらに、“lady” が、“prostitute” と同義語として使用される場合もある。このように、言語習慣にみられる差別的操作は、本稿で取りあげた (coquette) の例でも、明らかであった。これまで、単なるあげ足取りとして放置してきた、深刻な言葉の問題が山積していることに、私たちはやっと気づき始めたのである。

参考文献

- Ammons, Elizabeth. *Edith Wharton's Argument with America*. Athens: The University of Georgia Press, 1980.
- Daly, Mary. *Beyond God the Father: Toward a Philosophy of Women's Liberation*. Boston: Beacon Press, 1973.
- Foster, Hannah. *The Coquette: or the History of Eliza Wharton*. 1797; rept. New York: Columbia University Press, 1939.
- Fryer, Judith. *The Faces of Eve: Women in the Nineteenth Century American Novel*. New York: Oxford University Press, 1976.
- James, Henry. *Daisy Miller*. *The New York Edition of Henry James*, Vol. 18, 1907.
- La Bruyère, Jean de. *Les Caractères*. Paris: Editions Garnier Frères, 1962.
- Miller, Casey, Swift, Kate. *Words and Women: New Language in New Times*. New York: Doubleday, 1976.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. New York: Anchor Books, 1977.
- Petter, Henri. *The Early American Novel*. Columbus, Ohio: Ohio State University Press, 1971.
- Rowson, Susanna. *Charlotte Temple*. 1794; rept. New York: Funk & Wagnalls, 1905.
- Warren, Joyce W. *The American Narcissus: Individualism and Women in Nineteenth Century American Fiction*. New Jersey: Rutgers University Press, 1984.
- Wershoven, Carol. *The Female Intruder in the Novels of Edith Wharton*. London: Associated University Press, 1982.
- Wharton, Edith. *The House of Mirth*. Penguin Modern Classics 1905.
- . *The Custom of the Country*. New York: Scribner's 1913.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. New York: Harcourt, 1929.
- Ziff, Larzer. *The American 1890's*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1966.

寿岳章子『日本語と女』岩波新書, 1979.

別府恵子編著『アメリカ文学における女性像—作られた顔と作った顔』弓書房, 1985.

Summary

All Those Pretty American Flirts!

—A Vindication of the “Coquettes”—

Keiko Beppu

More than a decade ago, Mary Daly declared: “To exist humanly is to name the self, the world, and God.” If we may add this right of naming to “the inalienable rights” of man, woman has been deprived of one of “the inalienable rights” since the beginning of history. When God created Adam, He gave him the right to name all the creatures of the universe. To name then is to define, even to beget, a thing. Language conditions as well as expresses experience. Only recently feminist literary criticism has alerted us to the historical fact that men have been the namers and definers. And sexism and language has now become an area where poets and scholars venture to explore the root of all evil, as it were.

In the past, language has been used, largely by men, to define the other’s (= woman’s) experience, and regulate and restrict her activities. Similarly, literature, that is language imaginatively used, has contributed to the perpetuation of stereotypical fictional women characters, thereby depriving women of their individuality. This brief consideration of Eliza Wharton in Hannah Foster’s *The Coquette* (1797), Daisy Miller in Henry James’s “Daisy Miller” (1878), and Lily Bart in Edith Wharton’s *The House of Mirth* (1905) traces the genealogy of the “Coquettes.” It also examines how such naming (labelling) inhibits the free play of what is good in these “pretty American flirts,” which is no less than the violation of their personality and annihilation of their being. It is hoped, finally, that the paper will clarify the nature of the linguistic violence committed on women in literature and in life.